

## 筑波大学での6年間をふりかえって

デメジャン・アドレット

2005年4月から2011年3月（帰国予定）まで、職場のカザフスタンのセミパラチンスク教育大学で無給休暇をいただき、日本に滞在し、筑波大学に留学してきた。本稿では、留学期間が終わり、帰国するという一つの節目を迎え、この6年間、筑波大学でなにを学んできたかということに関心を寄せてご報告させていただきたい。

まず、筑波大学に来るまでは、どのような勉強をしてきたかについて簡単に述べておく。筆者は、1995年にカザフスタンの国立教育大学の体育学部を卒業し、大学院に進学した。そのときの研究は、ユース段階における空手のトレーニング法について3年間にわたり勉強させていただいた。1999年、大学院卒業後、修士号を取得し出身の教育大学に就職ができた。そこで2005年まで常勤教員として勤務していた。空手の関係で日本のことに対してずっと興味があったため、1999年の11月ごろ日本語の勉強を始め、1年間後、先生に文部科学省の奨学金についてご紹介をいただいた。そして、2001年に初めて応募した。この奨学金の応募は、4年間連続で失敗し、5年目にはやっと合格ができ、日本の筑波大学に留学することが決まった。

筑波大学に研究生という身分で入ってきて、最初の1学期は、日本語の勉強に専念したが、2学期からは、制度学研究室の研究会に参加させていただき、教育学専攻の受験することを決心した。そして、2学期からは、日本語の授業をやめ、受験勉強に集中し、2月の入学試験に臨んでいた。そのときの制度学研究室のサポート体制は、いまだ印象に残るものである。お蔭様で、無事合格ができ、4月から「入院」し、大学院の1年生の生活が始まった。その時については、大学院の授業と研究室の仕事（主に学会事務局）しか記憶に残ってない。厳しくて、楽しみのない一年だったと思われるかもしれないが、授業や研究の膨大な資料を読まされ、また、日常の先生方や院生とのコミュニケーションができた環境の中で、日本語のレベルアップとともに、制度研の研究会や嶺井明子先生に紹介いただいたニコルス（旧ソ連圏の教育）研究会では、先生方をはじめ、院生やその他の参加者のご指導のもと、研究者の卵として生まれ、成長するためのとても大切な時期でもあったと思う。なお、学会事務局の仕事も与えられ、それを通して、日本の事務的な仕事のやり方（ほう・れん・そう、時間厳守、個人情報の取り扱い等）の勉強もできた。

大学院の2年生となり、ほとんどの正規授業をとらず、修士論文の執筆に集中した。このとき、5つの大学入試センターの先生にお会いすることができ、インタビュー調査という研究方法を学び、これとともに入試に関する選抜要綱等の一次資料を集め、研究対象の実態にアプローチすることができた。ここまで、筆者は、研究対象である日本の大学入試について、図書館や研究室の中でできた机上空論になりがちな研究をしてきたが、これから入試センターへ足を運び、現場を覗き、実態と理論の両方をみながら初めての学術的な研究の試みができたとと思う。これらのデータがうまくまとまらなくて大変だったが、先生と先輩の方々のご指導を受けつつ、繰り返し書き直してなんとか論文の形ができた。ちなみに、その時は、初めて徹夜を経験した。そして、皆さんのお蔭様で、審査に無事に合格

し修士号を取得することができた。修士論文の内容は、簡潔にまとめると、日本の国立大学におけるAO入試について、特に教育的視点から入試過程における大学から受験生への働きかけのあり方に着目し、AO入試の制度設計および実践の現状と課題を明らかにすること目的とした。具体的には、「AO入試学生募集要項」の分析を通して、AO入試の全体的な特徴を把握するとともに、5大学の調査を通して、入試の実施過程の詳細とそこにおける共通する問題点を解明し、それらの解決のための方向性を明示する試みであった。

後期課程に進み、3・4・5年は、主に投稿論文や博士論文構想を考え、研究してきた。この3年間、論文の投稿に数回失敗を繰り返し、結局、「査読つき」論文の投稿ができなかったが、いろんな査読者の先生よりコメントをいただき、論文を書き直すというサイクルを繰り返し、論文の書き方について、非常に勉強になる作業の時期だったと思う。また、筆者の研究の原点は、カザフスタンの大学入試制度が抱える諸問題の改善に寄与したいという願いにあることにより、このときから研究対象は、日本からカザフスタンの大学入試に変わった。とりわけ、カザフスタンの大学入試制度のあり方を考える場合、特に受験者の能力・適性を多面的に評価する大学入試の諸外国における実践を踏まえた上で、検討することが有用であると考え。その中でも、日本の大学入試制度の戦後の変遷をみれば、さまざまな入試改革が実施されてきた。特に、臨時教育審議会以降の教育改革においては、入試の多様化・評価尺度の多元化の動向がみられ、現在のカザフスタンの大学入試制度が直面している問題との類似性を見て取れる。これより、博士論文においては、日本の経験を踏まえ、カザフスタンの大学入試制度の歴史的変遷と現在の状況を分析し、今後の入試の多様化や評価尺度の多元化という政策の可能性を模索・検討することを目的として考えている。そして、カザフスタンの大学入試をも研究対象に取り上げることになり、数回の現地調査に行ってきた。このデータはまとまらなくて、正規院生の3年間で博士論文審査までいたらなかったことをここでお詫びいたしたい。結果として、博士論文は、カザフスタンに帰ってから両国のデータをまとめ、審査を受けることが決まった。

この6年間にわたり、教育学を幅広く学ぶことができたといえよう。桑原敏明先生の人類教育史、清水一彦先生の教育の愛、藤田晃之先生の授業で篠原助市、宗像誠也、城戸幡太郎のそれぞれの教育論に触れることもできた。勿論、教育学系の先生方の授業にも参加することができ、とても恵まれた学び・研究の環境だった。また、既述したように筆者は研究者として成長するには制度研やニコルスの研究会のことが大きい。ここで、鋭い質問、厳しい指導を受けたりして、将来に自立した研究者となり、学界で鏗り合いのできるためのスキルが育てられると思う。特に、自分の問題意識をはっきりさせ、それにより研究目的と課題、研究方法と枠組みを設定し、研究を行い、得られたデータから適切な結論を導き出すプロセスの論理性や一貫性の大切さを改めて実感し、学ぶことができた。

勿論、この6年間は、勉強や研究ばかりではない、楽しいことも沢山あった。そーめんパーティ、スポーツデー、教育学専攻の懇親会や懇談会等のさまざまなイベント、研究室内のさまざまなパーティのとき、先生方と院生との楽しい時間ができ、ソフトボールやソフトバレー、テニス、マウントスキー等の新しいスポーツを初体験した。これは、一生忘れられないことである。

最後に、この場を借りて、桑原敏明先生、清水一彦先生をはじめ、筑波大学教育学系の先生方の皆さんに、院生方の皆さんに深く感謝を申し上げたいと思います。この6年間、大変お世話になりました。本当に、ありがとうございます。

Адлет Демежан (筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻 後期3年)